

## 豊川水系に見る「鬼」

— 鬼に見るその民俗的性格 —

春日井 真 英

“Oni”鬼, which appears to Toyokawa-river and Tenryu-river vasin.

Shinei KASUGAI

On this article, author tries to describe about Oni 鬼. The Oni is transcript into demon, evil, evil-deity or evil-spirits and so on. There are usually bad images with this word Oni. But if someone observes Oni precisely, then there will be another images of Oni 鬼 appear. Occasionally it plays a guardian of the local-area and for the person who stay there. This image, Oni 鬼 as a guardian of the area, can man easily find out at Hanamatsuri 花祭 in Kitashitara-district 北設楽郡, and Oni-festivals 鬼祭 around Toyohashi 豊橋 and Toyokawa 豊川 area. In festival Oni in Kitashitara 北設楽 appears deep in a night and steps a magical step 反閤へんべ at maido 舞庭 where festivals held, on purpose of stabilize the ground or the local-area and specially for a house, whom the owner invites to pray for safeness and to cure illness and for prosperity. Man believes that by the power of magical steps bad spirits are driven away and the sphere will calm down and also every badness disappears. The Oni in this Hanamatsuri-festival does no harm to the people, but it only celebrates the people, who gather at the maido 舞庭, where festival is held. Oni celebrates people and brings prosperity or good things for the people. This is seen at Toyokawa and Toyohashi area. In this area, Oni runs out from the shrine, where they supposed to stay, and appears by the celemony, and runs out from shrine 氏神, distributes sweets to the followers, such as children, who run in to houses and throw sweets as present from Oni. From these cases one can easily say that Oni is very kind to the people, and occasionally it is a guardian to the people, but does no harm to them. Oni as guardian of a local area may be one of very old ideas or characters, it may means that old elements of Oni still remains these areas. But watching through festivals, where Oni appears we can characterize that there are several types Oni. A) Hanamatsuri=type, B) Toyamamatsuri 遠山祭, where celebrates Oni as ancestor, C) Oni in Dengaku-festival 田楽または田遊び, masked man celebrates for good harvest

and wealth. But this type can be divided into three types such as Damine 田峰 type C2, this type is quite different to Niino 新野, and the performance of Kurosawa, Terano, Hutokoroyama Kanzawa as C3 type because we can find iron manufactural elements in it. And as type D I classified is the Oni around Toyohash and Toyokawa. And adding to it, type E, such as SASAODORI 笹踊り, three masked persons dram and dance covering their faces. Author classifies this SASAODORI 笹踊り as one of Oni, because Oni character is in origin 穩仁=Oni not 鬼, and 穩仁 means hiddenone, and 鬼=qui in Chinese pronunciation it means spirit of ancestor, usually unseen to the living person. And author thinks that the dancers of SASAODORI with dram and coverd face represent the ancestors of the people.

### ★はじめに

この研究は、平成14年—平成17年度日本学術振興会科学研究費補助金に採択された一般研究(C)(2)(研究課題番号 14510036)「豊川水系に見る十一面観音と津島神社の分布と文化的背景の考察」の一環をなすものである。

この「鬼」を巡る研究に辿りついたのは豊橋近郷の下条の鬼祭を追いながら、日程の都合で何回訪れても鬼との対面を果たせないままに、下条近辺の長瀬地区の祭礼に遭遇したのがきっかけであった。豊川を越え、下条から再び豊川市方面に向かっていたときに幟が見え、その幟に惹かれて地区の賑やかな声や、爆竹の音に導かれ、足を踏み入れたとき、子供達と鬼の一団が眼の前を駆けていったのであった。鬼と若衆、そして子供達は狭い地区の道をすごい勢いで追いかけたり、追いかけられたりしながら走っていくのであった。鬼の通り過ぎた後には袋入りの飴があちらこちらに散らばり、子供達ばかりではなく近所の人たちがみんなそれを拾い集めていたのである。

鬼は若衆二人に挟まれるように引っ張られるように、路地裏を駆け抜けながら、子供達に囃されながら民家の玄関先、あるいは縁側から中に入っていくのであった。しかも、道すがら袋入りの飴をガッサリと頭上に降らせながらすごい勢いで入っていくのであった。鬼に入られる家では、家族総出で迎え、鬼がばらまく飴を拾い集めるのであった。鬼はどこかの家に入る前も、また退散するときも飴を降らせながら次の家に向かっていくのであった。鬼の撒く飴をリュックにたっぷりと拾い集めながら地区の子供達と一緒に駆け回ったことは、ある意味でカルチャーショックであった。それまで鬼とは、人々から嫌われる存在というイメージしか持っていなかっただけに、子供達が大笑して鬼の周囲に押し寄せ、「ちょうだい」「ちょうだい」と鬼に何かをせがむ姿は考えさせられてしまった。鬼とはいったい何だったのだろうか。集落で歓迎される

鬼、家々で鬼のもたらすモノ、それらは何を意味しているのだろうか。

## ★★春の祭礼と鬼

春を待つ2月10・11日に行われる天下の奇祭、豊橋の安久美神戸神明社の「鬼祭」。クライマックスは赤鬼が天狗に挑む「からかい」。敗れた赤鬼は境内を出て町内を駆けまわり、道行く人にタンキリ飴をふりまく。飴といっしょに白い粉をまき散らすため見物人は真っ白になってしまうのだが、この粉をかぶると夏病みしないと伝えられている。

この鬼祭も考えてみれば、一見天狗に追われ、集落から外に放逐される形を取っているようにみえる。つまり、境内で天狗に敗れた鬼は退散し、通行く人にタンキリ飴と一緒に白い粉をまき散らす、この粉を被ると夏病みしないと説明がそれであり、鬼は天狗によって追われ、負けた存在として扱われながらも地区内を廻り、後には神社の中に戻って来るかたちになっている。いうなれば、これは鬼は天狗というものに負けるという形は取っているものの地域に密着した存在であることは明白と言える。同じように豊橋近郷の祭礼でも鬼は神社から出現し、地区内を駆けめぐり人々と交流し、また神社内に収まっていくのである。この鬼が神社を出、村落あるいは町内を駆け回るといことは、鬼は神社から出現し、人々の間を走り回り、また神社に消えていくという構図の中で動いていると言っている。また、普段は見えない存在としての鬼が、祭礼をきっかけとして社殿から立ち顕れるという姿を示していると言える。

ところで、鬼は容易に神社から外に出てこられるモノではないらしい。石巻神社（豊橋市4月第1日曜日）の鬼は四股を踏むように、岩を押しつけるようにして拝殿に現れ、注連縄を押し切ってようやく外に顕れる。ここではタンキリ飴を粉と一緒にばらまくが、一緒にでてくる獅子もまた同じようにタンキリ飴をばらまいていく。

このように人々の間を駆け回り、土産のように飴をばらまき、最後は神社の中に消えていく鬼の姿は、豊橋での安久津神社をはじめとして、これまでに述べた豊橋の下条、長瀬、行明、賀茂等各地に見ることもでき、さらに周辺の豊川、三河一宮などの神社の祭礼に見ることができる。（著者未見のものはまだ多く、町誌等を検討してみても鬼祭の分布の詳細もまだ充分把握できていない）

## ★★★鬼について考える

ところで、鬼とはいったい何者なのかという疑問が出てくる。しかも、それはどうも簡単に処理できそうなモノではない。このあたりのことは「座談会 鬼とは何か 鬼の虚像と実像をめぐって」<sup>1</sup>で 宮田登、小松和彦、高橋典子の三氏が鬼に関する様々な議論をされ、解釈が

示されている。詳しいことはその座談会を紐解いていただくことにして、この論文ではこの地域、つまり東三河から豊川、天竜水系に関連する地域の鬼について具体的な事例から考えていくことにしたい。

だが、あの座談会で小松和彦は次のように発言している。

ある時期に来訪神を表すときに、本来、鬼とはとても言えないようなもので神格を表現していた。それが、外からの鬼思想とか鬼の面の影響を受けて、それで鬼面を被るようになったと思うんです。そうすると本来、来訪神的なもの、日本海側にあるような「鬼面行事」は、もともと鬼ではなかったものが鬼と名づけたことによって誤解されてしまった。鬼にしたのは、ひょっとしたら折口信夫とか民俗学者たちが、鬼のような面だから「春来る神」としないで「春来る鬼」と言ってしまったことにある、という気もするのです。鬼とは違うものが、あるとき面とか何かで接触して鬼と呼ばれるようになった。とすると、鬼は両面を持っているのではなくて、その接触の結果としての変質である。鬼はやはり、本来的に鬼だというのが私の考え方なのです。<sup>2</sup>

ところで、本来的に鬼とはどういうことなのであろうか、小松和彦は「春来る鬼」というのは民俗学が作った一種の逆説だと思っているとした上で、

鬼という言葉を祖霊に置き換えてしまったら、鬼が鬼でなくなる。あるいは、それを神様にしたら、やはり鬼でなくなるのです。鬼は祖霊だ鬼は神様だと言ってしまったときに、それは鬼ではないと私は思っています。だから、鬼というのは基本的に怖いものであり、ネガティブなものであり、そういうものとして考えておかないと、私たちが使っている鬼という言葉の意味がどこかに行ってしまうんだと思います。鬼と神のイメージがどこかで融合したり、あるいは反転させるようなことが一部で起きたかも知れない。しかし本来鬼は恐ろしいものであり、人間に対して、あるいは人間の裏返しのイメージというのでしょうか、人間に敵対するものとして考えておかないと鬼が見えなくなってしまう。私は常にそう考えてきました。鬼は祖霊だと言ったときに鬼が見えなくなる、と言うのが私の考え方です。<sup>3</sup>

つまり小松和彦の言を借りると「鬼とは祖霊でもなく、人間に敵対する存在であった」ことになり、さらに、「神を鬼とした民俗学者の誤解である」とし、鬼という言葉と、鬼という言葉で示している基本的な属性を区別しなくてはいけないと指摘している。それは『風土記』<sup>4</sup>『日本書紀』<sup>5</sup>に書かれている鬼という言葉の中身、それから、そうではなくて私たちがいま鬼だと考えている存在の属性を持ったものはなんと呼ばれていたかを、考えなくてはならないとする二つの大きな問題提示である。<sup>6</sup>

たしかに、もっともな意見であり、鬼そのものを考える上で無視して進むことのできない要素である。とくに、小松の言う「鬼とは祖霊でもなく、人間に敵対する存在であった」と言う

指摘は鬼を考える上で大きな影響を与えてくることは疑いない。それは『風土記』「出雲国大原郡阿用」の条で鬼が人を食べたということと結びつくかも知れない。ここでは「目一鬼米而」と記され、恐ろしき存在として意識されていたらしい。本論では、大きく「鬼」について論を進めるのではなく少なくとも、この豊川流域で見る「鬼」をどのように理解するかを考えたい。

さて、これまで小松の考える「鬼」について記してみたが、一般的に考えられている鬼の概念というものも記しておきたい。それは、彼のいうところの「神を鬼とした民俗学者の誤解である」と言う記述とも関連する。

馬場あき子はその著書『鬼の研究』<sup>7</sup>の序文で鬼について詳しく述べている。参考のため、引用しておく。

〈鬼とは何か〉という命題は、さかのぼるにしたがいたいへんむずかしく、民俗学的な把握にも、未開の部分を残している。「鬼ハ帰ナリ」と説明された中国の鬼は、死者の魂の帰ってきた形だと考えられているが、この〈鬼〉の字を〈おに〉と訓じたとき、中国の〈鬼〉と日本の〈おに〉の微妙な混淆がはじまったと考えられる。折口博士は〈かみ〉〈おに〉同義説を出し、また〈おに〉は〈大人〉であるとして巨人説を唱えられた。近くは近藤喜博氏によって……河水近辺より発達する生活と自然現象、そのなかに生まれた鬼への畏怖を追求推測し、日本文化探求の一視点を明らかにしようとしている。また、山や河水の妖怪や山人については、柳田国男先生のすぐれた見解も資料的な民話とともに残されているが、これらはいずれも民俗学的な立場から、日本に発生し根づいた鬼の像を追求されたものである。

以上のような、鬼の原像追求のなかに民俗学の一分野を見ることは、今日ではすでに常識となったことであるが、これに対して、日本の鬼が土俗的束縛を脱し、その哲学を付与されたのは、中世において鬼女（般若）が創造されたことをはじめとしてよい、と考える。

馬場あき子は日本文化探求の一視点として「鬼」をとりあげるとともに、鬼の系譜を次のように分類して見せている。

鬼とは何か、鬼の範疇にはなお未確認の部分が多く残っている。いま、鬼の系譜を簡単に分類してみると、それは

(1) に日本民俗学上の鬼（祝福に来る祖霊や地霊）を最古の原像としてあげることができる。さらに(2) この系譜につらなる山人系の人びとが道教や仏教をとり入れて修験道を創成したとき、組織的にも巨大な発達をとげてゆく山伏系の鬼、天狗が活躍する。(3) 別系としては仏教系の邪鬼、夜叉、羅刹の出没、地獄卒、牛頭、馬頭鬼の跋扈も人びとをおそれさせた。以上は、神道系、修験道系、仏教系の鬼であるが、これとまったく別種の生活哲学に生きた鬼の族があったことを考えねばならない。(4) 人鬼系といお

うか、放逐者、賤民、盗賊などで、彼らはそれぞれの人生体験の後にみずから鬼となったものであり、凶悪な無用者の系譜のなかで、前記三系譜の鬼とも微妙なかかわりあいを見せている。(5) ついでは変身譜系とも名づくべき鬼で、その鬼への変貌の契機は、怨恨・憤怒・雪辱、さまざまであるが、その情念をエネルギーとして復讐をとげるために鬼となることをえらんだものである。

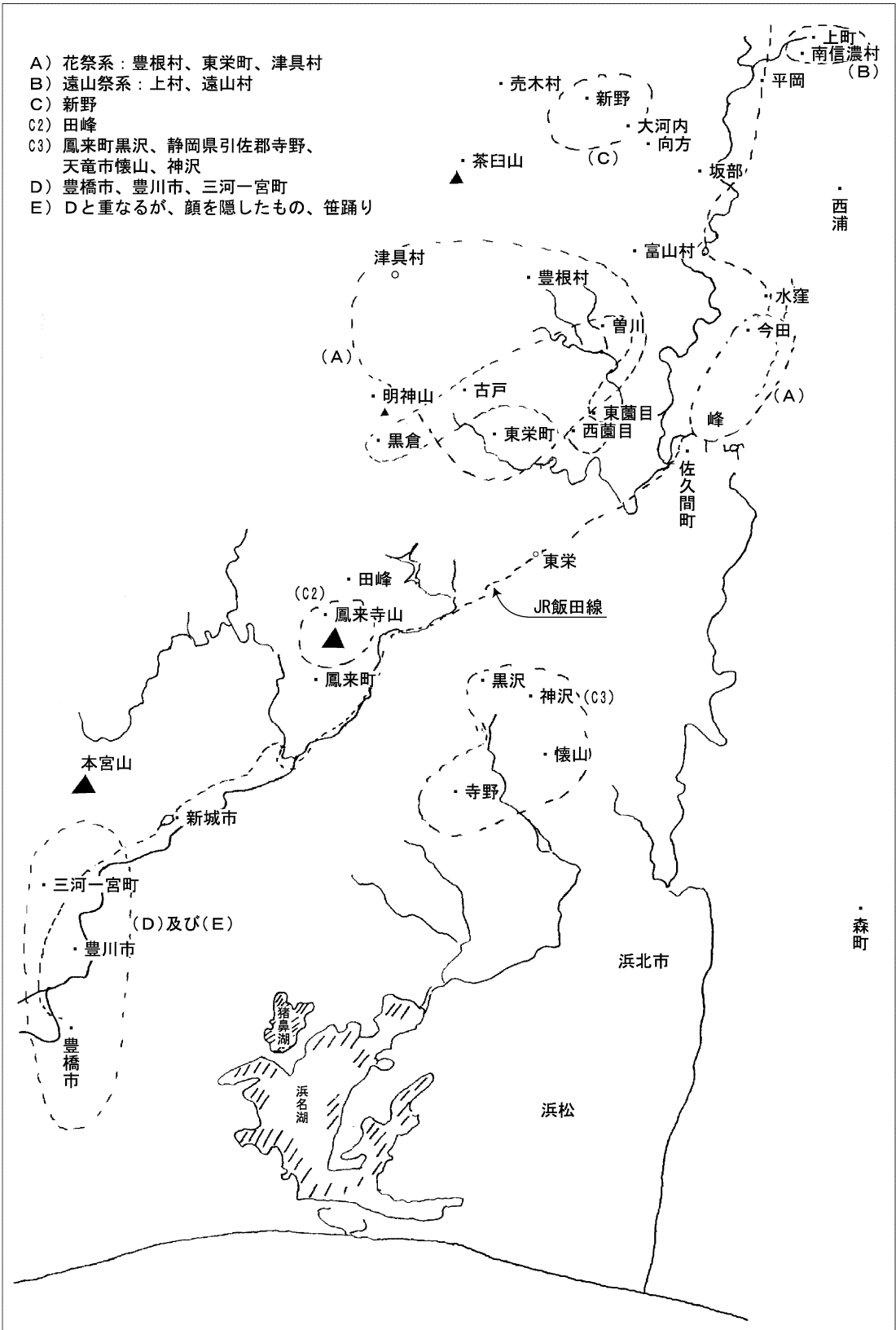
そしてここで、私はもういちど、〈おに〉と〈かみ〉とが同義語であったかも知れぬと言う説に立ち止まらざるを得ない。

小松と馬場の共通する問題点は相矛盾するかも知れないが〈おに〉と〈かみ〉が同義語であったかも知れないと言うところかも知れない。たしかに小松は、このような分類の上で鬼を祖霊、もしくは神と見ることに難色を示しているわけである。しかし、馬場は鬼女(般若)の出現によって土俗的束縛を脱したとしている。

問題は何をどこまで鬼というジャンルに組み入れて行くかというポイントであり、小松と馬場はそれぞれ「鬼」を問題としながらも、彼らの見ている視点がそれぞれ異なっていると言うところに注意しなくてはならない。馬場は「能」と文学の領域からこの鬼に注目しているのに対し、小松は民俗、日本文化の視点から見ようとしている。先に触れた小松の視点は鬼全般に渡って共通する何かを探ろうとしているため、かなり抽象的に見、それを普遍化しようとするところがある。そのため、幅広く鬼というモノを考えて行かなくてはならないことになる。そのなかで、馬場は日本民俗学上の鬼(祝福に来る祖霊や地霊)を最古の原像と考えている事は興味深い。それは、この豊川流域の鬼を考えると合致する部分が多いからかも知れない。だが、馬場は先に「日本民俗学上の鬼(祝福に来る祖霊や地霊)を最古の原像としてあげることができる」と述べ、鬼を祝福に来る祖霊、地霊と理解していることは折口以来のマレビト観に立っていることは明瞭である。そしてこの地域の祭礼で顕現する鬼達にも様々な形で、この性格が合致してくることは否定できない。

以上のように「鬼」を考えるに当たっては、先学諸氏の様々な問題提起があることを承知しながら著者は現存し、かつ「鬼」と呼ばれているモノ、あるいは姿の明らかならざるものをもその領域に入れて、豊川水系、天竜水系周辺での祭礼を検討してみることにはしたい。その場合、顔を隠して鞆鼓を囃しながら踊る笹踊りも「鬼」の一形態として分類することも可能になると考えている。つまり、顔を隠すということそのものが人に「姿を見せない」事に繋がるからであり、このことについては他で論じることにはしたい。

- A) 花祭系：豊根村、東栄町、津具村
- B) 遠山祭系：上村、遠山村
- C) 新野
- C2) 田峰
- C3) 鳳来町黒沢、静岡県引佐郡寺野、  
天竜市懐山、神沢
- D) 豊橋市、豊川市、三河一宮町
- E) Dと重なるが、顔を隠したもの、笹踊り



### ★★★★ 水系の祭から考える

東三河、あるいは豊川、天竜水系から鬼の問題を考えていくなれば、JR 飯田線の平岡近辺で天竜川に注ぐ遠山川の上流、長野県下伊那郡上村から南信濃村辺りで行われる遠山一族の霊を慰めるとされる遠山祭から注目すべきであろう。その祭礼では多くの面型が現れるわけだが、ここでは「天伯」及び遠山一族を示す諸々の面型をも「鬼」の範疇に含めて見ていきたい。それは、通常姿を現さないものを「鬼」の範疇にいれば、地域に根ざす諸々の怨霊をもそのように考えることは可能となる。もちろんこの祭礼の眼目は他の諸々の面型にあることも充分承知している。一般的に鬼と分類される面型の存在はこの地域から南下して天竜川添いの坂部、そこから西に山越えをすると阿南町新野の雪祭りのサイホウ（幸法）、鳳来寺鬼等を見ることができる、ここの鳳来寺鬼は禰直達に調伏されてしまう悲しい存在である。またこの阿南町の西に隣接する売木村の春の祭礼での御練りの露払い役の鬼を見ることができる。この御練りの鬼は新しいものかも知れないが、二匹でてくる。また、下伊那郡上村、南信濃村からそのまま南下すれば静岡県磐田郡水窪にいたり、そこの西浦の田楽の鎮めを鬼と理解することができるならば鬼と呼ばれるものの分布をかなり幅広く考えることができる。ここは天竜川添いの坂部、富山の山一つ東に当たるところとなる。そして、面型は同じく磐田郡水窪町奥領家今田の湯立て神楽も含まれてくることになる。

下伊那郡阿南町新野から東南に向かうと天龍村向方と大河内にいたるが、そこでは面型は出てこない。しかし、そこよりさらに南下すれば、愛知県北設楽郡富山村と豊根村に行き着く。この二村では御神楽、花祭で鬼、あるいは鬼の類に分類することのできる面が現れる。さらに富山村より南下すれば静岡県佐久間町峰、さらに川合そして先ほども触れたが、山を越えれば水窪町奥領家今田の湯立て神楽に行き着く。豊根村から南は東栄町になり、西には作手村があり、ここにも花祭の面型が存在している。先に触れたが天龍村大河内と向方では湯立てという類似した祭礼が行われながら、面型が出てこない。その理由がいかなるところにあるのかは不明であるが、祭礼そのものが姿を現わしてこないなにかを対象として行われていると見れば、おかしな事は何も無いといえよう。それは祭礼の場に飾られる切り草などの分析から考えられることであるが、細かいことは別に論じたい。そして、東栄町から南下すれば鳳来町の田峰、黒沢、西へ行けば設楽町の黒倉、東栄町の東では西菌目の田楽を見ることができ、そこでは面型がある。そのなかで花祭系の鬼の面型が出るのは黒倉、西菌目である。田峰では鬼というよりも天狗に似たものが出てくる。そして黒沢は山一つ越えると寺野、懐山、神沢となり、鳳来寺鬼というモノが出る。しかし黒沢には鳳来寺鬼は出てこない。寺野、懐山、神沢では三匹の鬼が出て火を撲ったりするが、この火を撲つ所作だけを問題とすれば坂部、豊根の祭礼の



面型の所作と通じてくる。しかし、火と面型を違う側面から考えると製鉄、鍛冶の問題に関連してくると考えることが可能となる。それは、東栄町の花祭の榊鬼などが庭火を悪戯する場面を考えてみてもいい。舞庭で舞、神部屋に引き上げる前に外にでて鉞で火を悪戯していく場面は鬼と火との関係の密接さを示していると考えられることを可能にしよう。それは、山見鬼のお供に松明を持った者が付くと無関係でもないであろうし、山見鬼の「山」を考えなくてはならない。

ところで、このように述べて来て気が付くことはこの段階ですでに祭礼の特徴が浮かび上がってきていることである。つまり、(A) この豊根村、東栄町、作手村の花祭あるいは倭舞は花祭系列に分類することができるとして、佐久間町の峰、川合さらに奥領家今田のものもこの花祭の系列に含めて見ることは可能であろう。それに対して (B) 上村、南信濃村のものは遠山一族の鎮魂の祭礼（だけではないが）という側面も見ることができることから (A) とは同じ系統と考えるべきではないといえる。さらに (C) 阿南町新野の雪祭りと言われる伊豆社の田楽は、あとで触れるように水窪の西浦田楽と同じ系統に入れてはならないと考えられる。さらに、内容的にこの二つを同系統に入れること自体問題があると理解している。それは、田楽と呼ばれているからと言って同じ系列に入れるべきではないと考えるからである。西浦田楽は能衆の庭上がりの後、高足、猿舞など行われ、舟渡りで観音様の到来から本格的に行事が動き出すと言えよう。そして地能で仏の舞が行われるところは、視点を変えれば遠山祭での遠山一族の出現のそれと重なってくる。つまり、「神への祈り」と、「神の出現」とを西浦はキチンと分離させているわけだが、遠山ではそのように見ることはできない。つまり、西浦は田楽という名を持っているが (B) の遠山祭の系統に入れるべきと考えたい。また、あとで触れるが失われてしまった田楽の中で東栄町古戸の面型などから考えると、この西浦によく似たモノであったかも知れない。これらを踏まえた上で寺野、懐山のおこない、あるいは他の地域の田楽も詳細に検討する必要がある。つまり、ここまでの段階では (A) 花祭系、(B) 遠山祭系、(C) 新野田楽系の三系列に分類することができると考えたい。しかし、この田楽の中でも細かな検討が必要なことは明白である。そのためにここでは設楽町の田峰田楽を (C2) とし、鳳来町黒沢、静岡県引佐郡寺野、天竜市懐山、神沢を (C3) としておきたい。それに加えてさらに豊川、豊橋近辺の鬼祭を (D) とし、さらに笹踊りを顔を隠したモノの顕現と見なしにければ (E) として異なった二つの系統の存在を考えることができよう。なお、設楽町の黒倉田楽は鬼の面型からは花祭系 (A) に、内容的には田峰の夜田楽の部類に、さらに黒沢の仲間に入れることは可能になる。しかし寺野、懐山、神沢はその演目の中に鳳来寺鬼という項目が存在することから鍛冶・製鉄の問題と絡むと考えられるので他の田楽とは分離させて考察したい。

ところで、豊根、東栄町には現在では行われていない田楽の伝承<sup>8</sup>を早川は伝えている。彼に拠れば、東栄町の古戸の他に、足込、河内、豊根村の曾川がその場所と記されているが、彼の記述からそこで鬼、または面型のモノの登場があったかどうかは古戸を除いて明らかではない。現存する田楽は東栄町では西菌目に、また設楽町では黒倉があるがこの面型の所作などは花祭の影響を受けていると考えていい。さらに、面型が出る処としては設楽町では三都橋の三候祭を挙げることができる。しかし、これを田楽の中に入れることには疑問が残る。さて、設楽町、東栄町より南下すれば鳳来町に行き着くが、そこは鳳来寺田楽、田峰田楽、黒沢の田楽が存在する。さらにこの地から東に眼を転じると寺野のひよんどり、神沢の田楽、懐山のおこない、引佐町川名のひよんどりがあり、面型が出るものの鳳来寺近辺のものと同じように見ることはできない。もちろん五穀豊穡の予祝儀礼という理解は可能であるわけだが、そこに顕れる面型の動き、その象徴的な行動には地域によって微妙な差があることを承知しておかなくてはならない。この他にも静岡県内の田楽、田遊び系の芸能については大いに考慮すべきものが多々存在する。とくに森町小国神社の田遊び、大井町藤守など考慮すべき対象は多々存在するのだが、水系の違いなどから大井町藤守はここでは扱わない。ここでは豊川および天竜水系に限定して考えていきたい。もちろん小国神社の田遊びは天竜水系から山一つ越えたところにあるという指摘は認めるとしても、さらに三河一宮の砥鹿神社、小坂井兎足神社の田遊びのようにいくつかのところでは面型がないということも問題とすべきであろう。だが、ここではこの論文本来の課題である鬼に視点を戻したい。

さて、豊川から三河一宮近辺まで分布について話をしてきたが、この豊川、豊橋近辺では春、秋の神社の祭礼で鬼、または笹踊りを見ることができる。この笹踊りを鬼の仲間に入れることには異論が出て来るであろうが、三人一組のこの踊りが顔を隠す事、時には若衆が彼らを取り囲んで周囲に見えないようにする上千両（豊川市）の事例を含め、笠を深く被り、顔を隠すようにして鞆鼓を打ち鳴らし、足を高く上げながら踊る姿から、姿を顕さないモノとしての異形の一つとして鬼の仲間に入れて考察の対象にしたい。それは、形態的に面型を付けていない鬼と連想できるところにあり、馬場あき子の指摘する「鬼と女は人に見えぬぞよき」のように、姿を見せない存在として機能していると考えられるからである。

ところで、この笹踊りは分布は宝飯郡から豊川、豊橋にかけて18カ所以上にのほりかなり広範囲に見ることができる。これを(E)と分類してみたい。だが、この(E)はまだ充分に把握できていない。豊川町誌<sup>10</sup>では鬼の面型のでる祭礼として上千両神社、行明神社、長草素盞鳴神社等を挙げている。この他にも豊川進雄神社の西の山車に縛り付けられる赤鬼の存在などまだまだ検討の必要なことは多い。この他にも町史などで収録されていない地域の多々存在する事例が考えることによる。

問題の豊橋、豊川近郊の「鬼」達は神社から顕れ、村落内を駆けめぐり村人達になにがしかの贈り物（幸をもたらしながら）をしながら廻る。そして、社殿での神事終了後、神社の中に消えていくわけだが、安久美神戸神明社以外では豊川市市田の伊知田神社でも天狗を見ることはできる。また、この天狗も素直に鬼に対立するもの、あるいは鬼を折伏するものと見なして良いのかという疑問も残る。もちろん天狗そのものが検討が必要になることは疑いない。

また、東栄町の花祭のように出花（榊鬼が各家庭の要請を受けてその家に出向き、反閤〈ヘンバイあるいはヘンベ〉を踏み、その家の幸せを祈る）のようにこの地域の鬼は集落の幸せを願い、集落を守護する側面を有していることは概括した範囲からも容易に伺うことはできよう。ただ、そのなかで、豊川水系から離れ矢作水系に近づくと滝山寺（岡崎市）の鬼祭がある。これは奈良時代に「役小角」が建てたとされる寺である。祭と鬼面については次のように説明されている。

奇祭の一つとして数えられる「鬼祭り」では、祖父・祖母・孫の3匹の鬼の面を厄男がかぶり、逃げ回る。

昔は父と母の鬼の面もあったので、全部で5つつだった。この5つの鬼面をかぶるのは、身を浄めた厄男であるが、ある年の祭礼当日、三河鳳来寺の山伏と称する二人がやってきて、「自分達は諸国の霊場を巡って、常に木食をなしている。行を行わなくとも身は浄められているから鬼面をかぶらせてみよ」と言った。

人々が止めるのも無視し、父面と母面を奪い、かぶり、祭りに参加した。祭りが終わり、山伏達が面を取ろうとすると、面が顔に貼り付いて取れず、ついには二人の山伏は死んでしまった。人々は二人を哀れみ、薬師堂の前に塚を築き、「鬼塚」と名付けたという。父面と母面も一緒に埋める事になったので、現在3つの面しかないのだという。

また、もう一つ別の話がある。

鳳来寺にも「鬼祭り」があり、常に、滝山寺と鬼の面の優劣を競っていた。ある時、滝山寺の「鬼祭り」を見ていた鳳来寺の側の者が、滝山寺の鬼面の事を罵った。

滝山寺の者はそれを聞いて憤慨し、「それなら、仏罰も恐ろしくあるまい。魚肉を喰って面をかぶってみろ」と言った。そして、魚肉を食べた鳳来寺側の者は、父面と母面をかぶると、面が取れなくなってしまった。思い知ったか、と言い滝山寺の者は、面をかぶった二人を塚に埋めてしまったという。

出典＝【『日本の伝説8 東海』 監修/日本伝説拾遺会】

一般的に豊穰を祈る祭礼だとされてはいるが、修正会あるいは仏教的権威に関連するものと見

ていく構造を有していることは明白であり、豊饒と結べる要素は少ないと見ていい。

さらに、岡崎から東、豊橋方面に戻ると額田郡幸田町の夏山八幡社の秋の祭礼にてでくる鬼には、隔年ごとには通常のいわゆる鬼と見なすことのできる形の面型と長野県下伊那郡阿南町新野の雪祭りで見ることのできるサイホウ（幸法）に大変類似した面型が出現する。この面型は火祭りの際の燃えさしの木の枝を持って周辺の観衆を「ぼけ」「ぼけ」と言いながら撲って廻る。この焼けぼっくいで撲られることによって何故人々にもたらされるのかは伝えられていないが、その姿の分析だけでも十分なページを割けることができよう。

以上ここまで触れてきた諸々の鬼と見なすことのできるものの出現する祭礼、これらで著者は単純に「鬼」という表現はできるだけ避けてきたつもりである。その理由は、小松和彦の指摘している「鬼という言葉と、鬼という言葉で示している基本的な属性を区別しなくてはならない」<sup>9</sup>という指摘を考えたかったためである。さらに「神を鬼とした」民俗学者の誤解である」という言葉を検討したかったためでもある。事実、ここまでの段階で天竜水系、豊川水系に分布する面型の顕れる祭礼を検討してみても（A）の花祭系の鬼の機能、集落あるいは家、さらに個人に幸いをもたらす働きを見ることができ、これは馬場あき子の言うところの「祝福に来る鬼の最古の原像」を想起させてくるし、鬼をマレビトとして考える手がかりにもなってくる<sup>11</sup>。しかし、小松の言う「本来鬼とは祖霊でもなく、人間に敵対する存在であった」とする姿は滝山寺ぐらいからしか見ることはできない。あるいは寺野、懐山、神沢の鳳来寺鬼、さらに新野の鬼を敵対する存在と見ていくことは可能であろうが、ネガティブな人間に敵対する存在としての鬼の姿はこの辺りでは浮かび上がってこないと言える。

今回この論文で指摘しておきたいことは豊川水系、天竜水系に限って概括してみてもネガティブな存在としての鬼の姿を見いだすことはできなかったことである。遠山の場合を含め水窪、西浦の田楽も幸福をもたらされることを予祝するものと見ていくことができる事は十分に理解できた。しかし、鬼に関する諸先学たちの指摘はさらに検討する必要があることは疑いない。この地域の鬼も、ただ面型を被っているものだけではなく笹踊りのそのように顔を隠しての祭礼参加者のこともさらに検討の対象として行かなくてはならないであろう。また、鳳来寺鬼という名称、その持ち物などの検討も必要となる、なんとすればその背景には鍛冶、製鉄の問題が繋がる可能性も否定できないからである。

## 註

- 1 「座談会 鬼とは何か」『民俗・旅・文化フォークロア』 第1号（1994）本阿弥書店 pp24～39  
所収 宮田登、小松和彦、高橋典子の三氏が「鬼の虚像と実像をめぐって」という題で話をされている。
- 2 前掲書 pp29
- 3 前掲書 pp26
- 4 『風土記』出雲国大原郡阿用の条 pp
- 5 『日本書紀』卷26斉明紀 朝倉の宮で天皇が崩御したあと、天皇の葬儀の場を山の上から大傘を着た鬼が覗いていたという。さらに『風土記』所収の「出雲風土記」の段に「鬼」の文字を見ることができる。確かに、註の4, 5を検討するだけでも小松の指摘する問題を理解することができる。
- 6 『民俗・旅・文化フォークロア』 第1号 pp27
- 7 馬場あき子 『鬼の研究』三一書房 1986（1971）pp7, pp9
- 8 早川孝太郎全集第2巻（以後 早川Ⅱとする）未来社 pp256～260
- 9 註1. 2. 3. 4
- 10 『新編 豊川町史』
- 11 『マレビトの構造』鈴木満男 三一書房 1974. pp11～19